

## 岡映研・「現在」研での 活発な研究会活動続く

### 国民融合論と岡映

6月13日、手島一雄さんが、表記のテーマで、報告されました。A31ページの詳細な年表と10ページに及ぶ膨大なレジュームが配布されました。

「部落解放同盟の分裂に至る経過に、岡映はどのように関わったのか」を追跡し「岡の思想と行動」を明らかにしようというきわめて野心的な問いかけが冒頭に掲げられていました。

配布された年表は、1956年から1976年までのものです。部落解放運動の歴史をいくらかでも知っている人がご覧になれば、この年代がなんであるかは、一目でおわかりになるように、部落解放運動の分裂が発生し、その間の対立が決定的になる時期です。その間の対立はなんだったのでしょうか。

そしてその間岡映の「思想と行動」は何だったのでしょうか。問題整理途中の報告ということもあり、両者の対立の内容は、二つの党派の政治的対立という以上には、必ずしも明確にされませんでした。

1965年、三木、塚本ら共産党系の委員が排除された後、岡映は、67年同盟の中執から副委員長に昇格し、70年退任まで、同盟に留まること、その間、部落差別拡大論と解消論とを批判するという二正面作戦を展開することなどが、指摘されました。

1975年には、北原泰作・榊利夫の『国民融合論』が公刊され、そこではすでに、部落差別を単なる封建遺制とし、封建的身分制度に対する安全弁とする政治起源論を超えた新しい部落理解が展開されています。こうした部落理論の展開に対して、岡映はどのように関わったのか、それが、手島さんの

つぎのテーマとして浮かび上がってきたのが、今回の研究会でした。

### 「現在」研 青森リンゴ農業の危機

元弘前大学教授宇野忠義さんが、青森リンゴ農家の経営危機について、周到緻密な報告をしてくださいました。

WTO体制下の青森リンゴ農業は、新興の中国産リンゴと、旧来よりのアメリカ産リンゴとに挟撃され、きわめて深刻な事態に陥っていること、そしてそれは単に青森のことだけでなく、実に日本農業そのものの危機を象徴するものだということが、詳細なデータに裏付けられて、展開されました。

日本農業に明日はあるのか。日本農業再生に関する質問がいくつか出されました。時間が迫っていたこともあり、本格的な日本農業再生構想について、再度ご報告くださるようお願いしたところ幸い快諾を得ることが出来ました。次回は、宇野さんの日本農業再生論です。ご期待ください。

(い)